



真吉の先祖は京都から？

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長
土森正一
文責
寺尾敏夫

下田地区187家の先祖を調査して判明したこと！

「下田町にいつ来たのか？」調査（岡照美さん提供）					
いつ来たか？	年号年代	どこから	軒数	備考	
1331年	弘元	京都	2	尊良親王配流 共に	いつの時代に 下田にきたの か明確に記録 がある家系が 89家ある。
1468年	応仁	京都	17	一条教房下向 共に	
1574年	天正		4		
1600年	慶長		22	山内家由未	
~1868年	江戸時代		14		
~1945年	明治~昭和		30		
不明	明治~昭和		30.0	56	
不明	不明		22.4	42	
合計			100	187	

●下田地区に住む岡照美さん（八十六歳）が地元百八十七家の先祖を二十余年に渡って戸別訪問をして調査研究した資料を拝見、そこから見えてきたことは、331年以降の歴史が記憶されており、一度

樋口家の先祖を辿る？

会報誌でご紹介したことであった。この調査を現在に再度行うとしても先ず不可能だろう。何故なら当時の過去を知る長老達が既に鬼籍に入っており、現当主の記憶には伝えられていないのである。●悲しいかな各家庭に於いて先祖をお祭りする習慣が希薄になって居て、我が家の先祖についてほとんどが家庭で関心が薄くなっている。これには戦後やってくるマッカーサー率いる占領軍が如何に日本を弱体化するかという方針の基、戦前の日本の仕組みを解体したのである。具体的には戦前の戸籍法を解体した。戦後日本の家庭は本家、分家の概念が無くなつて各家庭は家を守るという文化を放棄したので、自分の一族の歴史を守る意識すら希薄になっている。

●岡さんの調査の結果

1331年 尊良親王

1436年 一条教房

1600年 関ヶ原

1608年 中村藩廃絶

この年の出来事がキーワードになっている。

下田の樋口家

●この岡資料の中に下田に樋口家が現存されていた。岡さんの記録では「中村の本町から下田に移住してきたが先祖は一条教房公の下向に従って来た」との伝承を聞き取っていた。一方、樋口真吉の子孫の係累である説もあるが現在では未確認である。そもそも樋口真吉の父、信四郎は「樋口真吉日記」(渋谷雅之著)によると長岡郡大津村に生まれている。一条兼定が長曾我部氏に滅ぼされた時、五代・内政(兼定の嫡男)は長曾我部氏が大津に、

樋口信四郎

樋口家の人々が中村に居住するのは、真吉の父・信四郎の代からである。信四郎は安永五年、長岡郡大津村に生まれた。ここは樋口家の祖先定住の地である。代々藩の卒族で、信四郎の代に至るまで武道を家芸としたことはない。信四郎は年少より武芸を嗜み、無外流刀術を土方三之丞に、種子島砲術を田所庄兵衛に学んだ、とされている。田所庄兵衛(林利)は高知市筆山の田所家墓所に小左右衛門(重壽)の養子として記録されている。よく似た名の田所庄兵衛(林利)が御鉄砲方として記録されており、同一人と思われる。この人物は寛政十一年に死去して、幸馬(真和)が養子に入り跡を継いだ。幸馬の次男が田所左右次である。田所庄(莊)兵衛に学んだ信四郎の砲術の腕はかなりのものだったらしく、「樋口先生」に次のようにある。

「天明八年、藩侯砲術を仁井田浜に聞するの事あり。翁時に齡僅に十三、命を受けて射撃を試み、試み、而して的中過たざるもの、翁の凡常の器ならざるを知るに足るなり」

no	名前	ふりがな	身都道府	どこから	年号	西暦	職種	岡照美さん調査資料
28	江口	えぐち	京都	京都	応仁	1468	武士	一条教房下向と共に1574年 下田浦(4名)(長曾我部江口水軍) 山内1656年
38	大原	おおはら	京都	京都	応仁	1468		一条教房下向と共に△
70	堺	さかい	京都	京都	応仁	1468	武士	船大工
78	島村	しまむら	京都	京都	応仁	1468	武士	一条教房下向と共に 1685年(4名) 3万石
101	茶畑	ちゃばた	京都		応仁	1468		一条教房(名字をつけた)
105	塞永	とみなが	京都	京都	応仁	1468		
106	泥田	どろた	京都	京都	応仁	1468		宮崎姓
133	樋口	ひぐち	京都	京都	応仁	1468		一条教房下向と共に
139	福井	ふくい	京都	京都	応仁	1468		酒造り
150	前田	まえだ	京都	京都	応仁	1468		
170	森山	もりやま	京都	京都	応仁	1468		
174	矢部	やべ	京都	京都	応仁	1468		
175	山崎	やまさき	京都	京都	応仁	1468		中村市資料
177	山本	やまもと	京都	京都	応仁	1468		

海の国、土佐の源流 を西南四国から探る

— 鎌倉時代の京の覇者との関係をふまえ —

はじめに— 貴人、土佐に来たり—
1、西南四国で貴人を知る
2、小京都中村を考える
3、幡多にとっての久礼を考える
まとめにかえて— 海の国、土佐の源流を模索する—

エビローグ— 義満を支えた土佐の臨濟、そして津野 —

< 鋤柄俊夫教授提供 >

御所体制を敷いた際に、何名かの家臣団を連れて中村から大津に移った。その中、桶口家が居た。その桶口家は、土佐藩士に採用され、中村に移住したと想定できる。すると中村には、1. 4. 6. 8. 年一条教房の下向に随行してきた桶口家も百年の間、一族は増えているはずで、1585年頃に

大津に移った桶口家は別に中村に残った桶口家がいたと想定できる。下田に移住した桶口家は、桶口真吉家とは同族であるが中村に残った桶口家の可能性が、あるのではないかな。

一条教房以前は？

●我々四十万市民は一条家以後の中村の歴史をよく耳にするが、何故に一条家が幡多の荘

●実に興味津々の講演内容であった。講演資料を提供してもらい、説明すると、下図は鎌倉時代の天皇を中心とした系図で、京都の實権を握っていたのが西園寺公経であることが明白に分る資料である。西園寺家は源頼朝の縁者でもあり、天皇家とも繋がっている。その

鎌倉時代の京都の実権

の領主になったのか？詳細は聞かされていない。本年に高知県立歴史民俗資料館主催の西南四国の中世社会というテーマで連続歴史講演会が開催中で、3月9日の「海の国、土佐の源流を西南四国から探る」(講師・鋤柄俊夫先生)の講演を拝聴した。

公家たちは彼の地に何を求めたのか？

会期 2025年7月 2/28(土)~5/6(日)

西南四国の中世社会と公家

高知県立歴史民俗資料館

西園寺家と昵懇であったのが、撰家の九条家。西園寺家の隣地は西園寺家の隣地という。この西園寺家と九条家は、対外交易に熱心な公家であったと云われており、その交易で勢力を伸ばしたと見られる。その九条家が幡多の荘の実権を握ったのも、西園寺家と繋がっていたからである。推測出来る。九条道家は西園寺家と組んで西園寺の経営に乗り出して、幡多のみならず長崎と北九州の3か所に荘園の利権を得ていたことが判明した。我々は南予が西園寺家の荘園であったことなど全く知らなかったが、鋤柄先生の研究で、長崎と北九州にも西園寺家と九条家が隣り合っていたことが判明した。

(3) 鎌倉時代の京の覇者

① 西園寺公経という人物(1171~1244)

道長の父兼家の兄弟にあたる公季子孫の通季が祖。鎌倉時代初期に登場した公経。母の実家は後鳥羽につなぐ「持明院家」。彼の妻は源頼朝の姪。鎌倉と強いつながり、天皇家に対して大きな影響力。彼が造営した北山西園寺(後の金閣寺)は藤原道長の法成寺をしのぐと言われ、権力は平清盛を超えたと評された。

a. 淀川と瀬戸内を経てつながる東アジア交易

公経が檣で三間四面の殿舎を造り宋に贈ったところ、宋帝が喜び、銭貨10万貫と種々の珍宝がもたらされ、その中には人の言葉を一字違わず話す鳥と、普通の牛の20頭の力を持つ水牛がいたという(『民経記』)。

b. 宇野御厨と橘樹田遺跡

元亨2年(1322)「西園寺実兼処分状」で年貢の小牛が今出川兼季と西園寺実衡に折半して与えられている。その中心部が松浦党の勢力範囲と重なっている。「御厨」地名は現在の長崎県松浦市西部に所在。その東の伊万里湾を望む「橘樹田遺跡」から東播磨系埴鉢。「宮ノ下り遺跡」から緑釉陶器と東播磨系埴鉢および畿内系の瓦器。

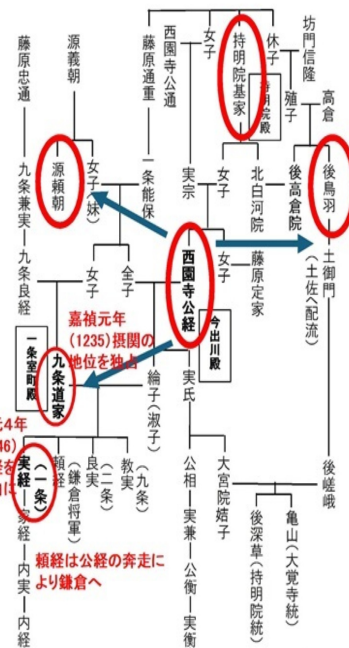
c. 宇和庄

嘉禎2年(1236)に、鎌倉幕府は西園寺公経の強い要望により、宇和郡を西園寺氏の宇和庄としている。

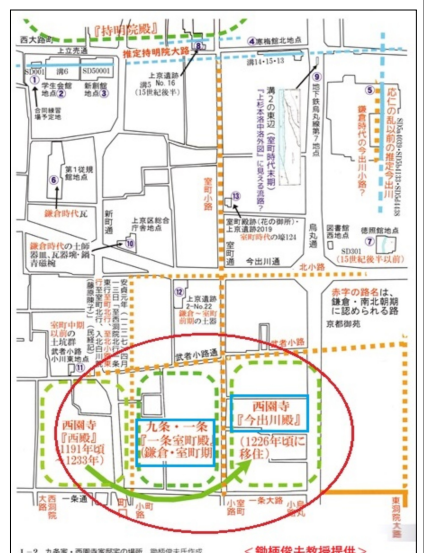
② 九条道家という人物(1193~1252)

撰家の地位を独占し、子は鎌倉將軍、そして幡多荘。嘉禎3年(1237)の史料に「幡多御庄本郷」がみられ、建長2年(1250)には九条道家が家領の処分を定め、一条家祖の実経に「土佐国幡多郡本庄 大方庄 山田庄 以南村 加納久礼別荘」が譲られている。

< 鋤柄俊夫教授提供 >



を經營していたことが明らかになった。●九条道家の父兼実は1207年法然上人が幡多に流罪になり、讃岐まで来た時幡多の地へ行かずとも良いという判断を朝廷にさせた人物として知られている。九条家と西園寺家とは単なるお隣さんで



1-2 九条家・西園寺家関係の場所 鋤柄俊夫氏作成 < 鋤柄俊夫教授提供 >

教実のみならず、次男二条良実、四男一条実経までも撰関にした。以降二条家と一条家も撰政・関白を出す撰関家の一つとなり、近衛家とその庶流鷹司家と併せて五撰家と呼ばれるようになった。



建長二年(1250)に**九条道経**が家領の処分を決め、四男の**実経**に一条家祖として「土佐国幡多郡本荘、大方荘、山田荘、以南村、加納久礼別府を譲つた」との記録があるらしい。幡多荘が記録に載った最初と云われているのは嘉禎三年(1237)、

「幡多御庄本郷」だとされているが、鎌倉幕府とも縁続きの西園寺家と共に朝廷の権力を

一手に握って関白の地位にあつた**九条道経**が、左図の地図に示す莊園をこの両家の支配下に収めるのは何の造作も無かつたと思われる。しかしそれよりも少し前1221年に**土御門上皇**が幡多に流罪として来られてゐるから九条家の支配下になつた時期はこの年以前まで遡るかもしれない。それにしても両家の莊園支配の地図は初めて見た。

2、小京都中村を考える

(1) 中世都市の基本形は「市」と「館」＝港と館＝経済と政治

※政治と経済が空間的にまとまるのは近世

<リンク17>

①スタートは平清盛の福原
「平野の館」と「大輪田泊」を湊川がつなぐ

「高岡」と「上ノ村または井尻」と仁淀川
「母代寺」と南国市の「大湊」と物部川？

②中村は「館」、下田は「市」

中村と下田はセットで
最初から地域拠点の条件を備えていた

③館と市には、大きく2種類

ii、一乗谷→都市(城戸の内)と港湾集落(安波賀)



それでは一条氏の小京都中村の姿は？

<鋤柄俊夫教授提供>

時代	和暦	西暦	幡多荘に関係する 記 事
鎌倉時代		1207	法然上人・幡多へ流罪（天皇は土御門天皇）
		1221	承久の変 土御門上皇、幡多へ
	嘉禎元年	1235	西園寺公経・摂政関白の地位を独占
	嘉禎2年	1236	西園寺公経は鎌倉幕府より宇和郡を得て宇和荘とした。
	嘉禎3年	1237	「幡多荘本郷」の記録が残っている。
		1246	
	建長2年	1250	九条道家が息子の実経（一条家祖）に幡多荘を譲った。
室町時代	元徳3年	1331	元弘の乱 尊良親王が流罪される。下田・有井川 鎌倉幕府崩壊
		1333	
		1336	南北朝時代
	応仁元年	1467	応仁の乱始まる
	応仁2年	1468	一条教房は京を逃れ幡多荘に下向
		1543	鉄砲伝来
	1549	キリスト教伝来	

●幡多荘が九条家から一条家の所領になった1250年から**一条教房**公が応仁の乱を避けて幡多荘に下向した1468年までの二百年間の中村の様子に就いては研究が進んでいるようだが今は未だ詳細はよく分かっていない。

●この号の最初に触れた岡照美氏の下田地区187軒の出自調査は実に貴重な研究である。一条公に随伴して幡多に移住した家族はどれ位だったろう。その実態は知る由もない。

恐らく岡さん以外にこのテーマでの研究調査はないのではないか？中村には江戸時代中期以降の74家を克明に調査した「**上岡文書**」がある。これには各家の出自が明らかにされているかもしれない。

●応仁の乱は京都を破壊し尽くしたとされ、**一条兼良公**は奈良へ避難し、**教房公**は幡多へ。恐らく関白の地位にあった**教房公**には戦火に追われた商人達や武家達が随行を希望したのであろう。「堺屋」の屋号で知られている京町

●「遠方より友来る楽しからずや」とは論語の一節である。東京から会員の岡村大さんが帰省されてお会いした。SNSを通じての交流はあるもお会いするのは初めてである。旧知の仲なので初対面を感じはない。沢田さんと郷土博物館と下田砲台跡地などをご案内して楽しいひと時を過ごすことが出来た。

編集後記

●樋口真吉の新作動向
が出来たので「新ロイヤルホテル」のエレベーター前のロビーと「いやしの里」ロビーにセッ トしました。ぜひご覧下さい。左が岡村氏



の藤倉家は堺の商人であつたと云われている。下田の江口家の墓碑には右の写真のように**一条兼良公と教房公**の名も入れて我先祖は京都から一条氏に随伴したと墓碑に刻している。

下田にはこのような墓碑が幾つかある。一体**一条教房**公と共に關西からどの様な家族が幡多荘へ行動を共にしてその後どうしたのか、その全貌と歴史を知りたいものである。

